

絵雑誌「幼年画報」における正月に関する記事の考察

～巖谷小波の作品にみる陰陽五行思想を中心に～

福島 右子

(聖和大学大学院)

はじめに

前回の発表で述べたように、1906(明治39)年創刊の月刊カラー絵雑誌「幼年画報」は、実際の保育にも用いられていた。そして創刊より3年間の歴史的人物記事の考察により、次の特徴が浮上した。1) 当時の幼稚園保育談話材料(歴史譚)と同傾向にあること。

2) 武人・皇室が多く、第1期国定教科書と比較して偏向的傾向があること。3) 武人の中でも「忠義」をテーマにした題材が頻繁に登場すること。このように、日露戦争後という時代思潮に影響を受け、天皇中心のナショナリズムに沿った人物が誌面で強調されたわけである。

今回の研究においては、発行部数平常6万部、新年号は12万部と絵雑誌の王座を占めた事に着目し、通常の2倍の子どもの手に渡ったと推測できる新年号の内容分析を試みた。新年号＝正月記事とイメージしやすいが、「幼年画報」も例外ではなく、正月色で彩られている。では、当時の正月記事内容は具体的に如何なるものであったのか。特に巖谷小波中心の絵雑誌であるだけに¹⁾、彼の作品を中心に内容考察している。

「幼年画報」における正月関係記事の分析

「幼年画報」の各1号(1月刊行)について、現在確認できる第30巻までの正月に関わる記事を項目毎に分類すると、1.十二支に関係するもの 2.たこあげ 3.はねつき の順に多く挙げられ、続いて門松、日の丸国旗、初日の出、カルタ、双六となった。(この項目の詳細は発表にて揭示。)

小波は、正月の遊びに対して奨励し、快活に遊ぶことを提唱しているため²⁾、たこあげなど遊びの項目が多い。しかし、それらの遊びよりも、十二支に関するものの方が頻繁に登場することはひとつの特徴と思われる。そこで、十二支についての考察を深めたい。

小波は「幼年画報」創刊と同時に「家と女」も出版している。その文中でこう述べている。「今年に於いて今回の事あるのは蓋し偶然ならぬことだ。見給え今年甲辰の歳である。」³⁾ 今回の事とは、日露戦争の勝利である。ここで彼は、甲辰が如何に戦争に縁があるのかを説明し、勝利は干支によって既にわかっていただことだと断言していることは興味深い。当たり前の事として干支の性向によって戦争状況を解釈しているのである。この時代に干支の法則を言及するということは、彼が、一般の人々に比べて多くの理解を持っ

ていた為であると考えられる⁴⁾。

そこで次に、「幼年画報」各巻に沿って、十二支の登場する割合を検討する。なお、欠号のため未確認の巻があるが、後に確認できた際には加えることにし、今回は十二支が二廻りする第24巻までを掲載する。

表1:「幼年画報」各巻第1号に登場する十二支の割合

巻号	十二支	A	B	巻号	十二支	A	B
1	午	2	36.1	14	未	5	19.4
2	未	5	33.3	15	申	6	19.4
3	申	5	36.1	16	酉	9	41.7
4	酉	5	33.3	17	戌	7	27.8
5	戌	8	36.1	18	亥	1	2.8
8	丑	8	47.2	19	子	3	16.7
9	寅	6	38.9	20	丑	2	8.3
10	卯	4	38.9	21	寅	5	27.8
11	辰	4	22.2	22	卯	7	25.0
12	巳	0	0	23	辰	1	11.1
13	午	13	69.4	24	巳	2	5.5

号はすべて第1号(新年号)

A:各細目に対して各支が登場する回数

B:全頁に対して各支が登場する割合

(頁単位の割合のため、1頁に複数の支が登場する場合は、それを纏めて1頁分と考えている。単位:%)

考察

表1をみると、1918(大正7)年刊行の第13巻第1号に登場する午、つまり馬の割合が極めて高いことがわかる。

小波の「午年」や「馬」への興味といえば、一時期は異常なほどであった。彼は、自らの馬のコレクションのために千里閣を建設し、「千里閣千馬会勧進の辞」として次のような手紙を友人知己に送った。「～さて私事明治三年午歳に生まれ、此大正七年を以て、四度目の午歳を迎える事になりました。是より先私は、十人もあった兄弟の中に、一人も午仲間はありませんのに、同じ午歳に生まれ合わせた祖母と父を持つて居りました所、其祖母には明治二十四年に別れ、父には同三十八年に逝かれましてから、只一頭取り残された心細さに、次の三十九年が恰も午歳に当たりましたを幸ひ、馬の玩具の採集を創めました。～」⁵⁾

従来からの蒐集癖により、丁度「幼年画報」創刊の年から馬に関するものを集め始め、それは玩具だけでなく諸種に渡り、1000点以上のコレクションとなったのである。よって、大正7年(午歳)に刊行した「幼年画報」第13巻第1号の馬の頻度が、他年の十二支の

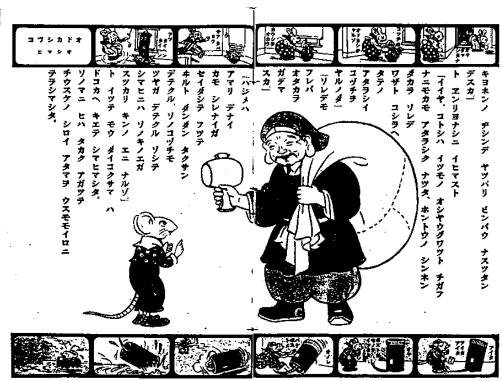
登場頻度より高いことは、小波自身の馬に対する思い入れの強さの影響だと説明できる。なお、創刊号の割合は少ないが、馬蒐集を始めたばかりで、1月1日に創刊号を発行した時点では、まださほど馬に執着していなかったからではないか。この他にも小波は、午歳男の会である明三会に入会していたり、1918(大正7)年午年に「十二支画帖午の巻」など、馬に関するものを出版していることも特徴的である。

第3巻第1号には「三匹猿」が掲載された。小波の作品である。ここでは庚申信仰の土台が用いられている。

庚申信仰とは中国の道教にルーツを持ち、主に農業地帯において講組織により形成されるものである。その内容は、人間の中の三尸の虫が60日に1度天に上って人の悪を神々に告げるという謂れにより、60日に1度寝ないで夜を明かす行事で、そのため見ざる、言わざる、聞かざるという言葉が出てくる。本尊として拝む神が、神道では猿田彦とされることから、猿がその象徴として受け入れられたわけである。

第19巻第1号の中で、小波は「キノエノ コヅチ」を発表した。この年は子年なので、鼠が主役で、内容は、白鼠のチョウスケが大黒様からお年玉として小槌をもらう、という筋になっている。白鼠チョウスケは、大黒に「ドウゾ コトシモ アヒカハラズ ゴヒイキヲ オネガヒ マヲシマス」と言う。白鼠は別名大黒鼠ともいわれることは一般化されているが、単にその名のゆえに「ゴヒイキ」にしてもらっているのではなく、ここに陰陽五行思想が意図されているのである。

大黒の祭りは本来「子祭」と言い、子月子日、後には年6回の甲子に行われるようになり、「大黒様の祭日が『子日』、しかも1番望ましいのが子月子日子刻ということになり、大黒様とは『子』によって象徴される太極の神霊化ということ」⁶⁾ のため、「子」が重視されている。また、大黒が「ナニモカモ アタラシク ナツタ ホントウノ シンネン ダカラ」と言う場面があるが、わざわざ新年をこのように表現するのは「子」が十二支の最初だからであろう。



「幼年画報」第19巻第1号 キノエノ コヅチ

この他、小波は「黒と白が仲良くなって、めでたし」という趣の作品も掲載している。(第21,22巻各1号)これは、対極のものを合わせることによってバランスを保つという、陰陽五行説の法則を用いていると考えられる。

結語にかえて

巖谷小波は、11才で監谷青山の塾へ、15才の時は川田薨江の塾に父の薦めで入塾し、漢学を学び、元藩医父修の死後、彼が父の五行の稀古本を見つけたエピソードもあるが、祖父、父親共藩医であり、漢方に詳しい家庭⁷⁾であったことなど、陰陽五行思想の世界観は小波に自然と継承された。そしてそれは小波中心である「幼年画報」にも反映し、小波は読者である子ども達にその世界観を継承することになる。

継承が文化を育むことになるわけだが、果たして保育者はそれを無批判で「文化だから」という理由のみで受け入れてよいのだろうか。

現在、陰陽五行思想を意識して生活している日本人はごくわずかに過ぎない。しかし、日本の風習やちょっとした生活習慣の中で、この法則が用いられていることが極めて多いのである⁸⁾。当たり前とみなされる習慣の起源を知り、歴史の中で風習化して無意識に継承されていく文化を再度検討することによって、子どもに何をつたえ、何をつたえないべきか考察する必要があるのではないかな。

そして多かれ少なかれ子どものための読み物も、風習の継承の手助けとなっていると思われる。そこで過去の検証が重要となる。今回の研究においては、小波の個人的趣味と、陰陽五行説の法則(彼自身が意図していたか否かは推測の域である)が、いかに「幼年画報」の誌面に反映されたかを確認することができたが、発表において、より詳細を述べたい。

註

¹⁾ 鳥越信他(1993)月刊絵雑誌「幼年画報」(1) 一解題と細目一型和大学を参照されたい。

²⁾ 巖谷小波(1906)「家と女」隆文館 p.15を参照されたい。

³⁾ 巖谷小波(1906)「家と女」隆文館 p.35より抜粋。

⁴⁾ 厳密な意味で干支と十二支は区別して考えなければならないが、陰陽五行の法則に従っている点で同じである。しかし、明治期はこの法則を使用することは否定されていた。

⁵⁾ 巖谷大(1974)波のあし音 新潮社 p.232より抜粋。

⁶⁾ 吉野裕子(1994)「十二支」人文書院 p.35から引用。

⁷⁾ 漢方だけでなく、蘭方、西洋医学などにも精通し、宗教的には一貫したものは持たなかったが、常に信仰対象は存在した。

⁸⁾ 吉野裕子(1983)「陰陽五行と日本の民俗」人文書院 / 永田久(1989)「年中行事を科学する」日本経済新聞社、などを参照されたい。

主な参考文献

巖谷小波 (1943) 「桃太郎主義の新教育」文林堂双魚房

◇ (1913) 「小波身上断」宝学館書店

◇ (1916) 「日と耳と口」耕文社

坪谷善四郎 (1937) 「博文館五十年史」博文館

他